闇色

紅理夢　理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇色

【Ｎコード】
Ｎ２４３０Ｗ

【作者名】
紅理夢　理緒

【あらすじ】
世界の誰も及ばないほどに天才で。運動も出来る。
そして世界の誰も及ばないほどに膨大で驚異的な魔力をもつ・・・
もはや人外とも言えるほどに天才な少女・・・黒蘭＞コクラン＜優妃＞ユウヒ＜。
そんな彼女の身辺で起こる様々な出来事、そして彼女のもつ秘密は・・・
＞更新ペース等が気になる方は作者ページを見ていただき、こうい

うものだ、と納得していただけると嬉しいです。どうしてもイヤだ、
と言う方はお読みにならない事をおすすめします＜

No. 1

主人公◇黒蘭　優妃＞コクラン　ユウヒ＜
１１月１７日生まれ
Ａ型
１６５センチ
我が道を行く。な性格で、好きなモノはスキ、嫌いなモノはキライ、とハッキリ言うタイプ。それが物でも者でも関係なく気に入らなければ即座に口から正直な言葉が出る。
派手、或いは女の子らしい服装や物を身につける事はあまり好まず、動き易さ、楽さ、シンプルさの３点を重視する。
が、出会った人々全員が絶世の美少女と言う程の美貌をもつので似合わない服装はあまりない。
髪色や瞳の色などは銀髪に蒼にも碧にもみえる不思議だが綺麗な瞳の色。

神城　玖音＞カミシロ　クオン＜
４月３日生まれ
Ａ型
１８８センチ
無口なクセに誰にも気付かせないが唯我独尊。な性格で、好きなモノはスキだと態度に表し、嫌いなモノはキライだと無言の圧力をかける。
身につけるもの等については、優妃と似ていて派手な物などは好まず、動き易さ、楽さ、シンプルさの３点を重視する。
出会った人々全員が「彼より美しい男性はいない」と言う程の美貌をもつ。

髪色や瞳の色などは金髪に白メッシュで碧眼。

プロローグ

私は物心ついた頃から、外出' がキライだった。外出する時にはいつも必ず同じような人達に囲まれていた。
その人達が嫌いだった訳じゃない。…その人達に囲まれる私をみる目が嫌だった。
私達をおそれる目…おそれてまでみる意味も必要もない筈なのに…それでもみる。
その目でみられるのが嫌で外出を嫌がる私を…貴女はいつも連れ出そうとした。
あの日も例外ではなくて…
私は気まぐれを起こして…、少し行けば満足するだろう' …そんな風に思って外へ出た。
…でも、やっぱり耐えきれなくなって…私は、逃げた。
前もろくにみず…声が聞こえたような気がした瞬間…全身に衝撃が走った。
衝撃による痛みを堪えて振り返って…眼に入ったのは…多量の鮮やかなアカ。
色の中心には…貴女の姿があった。体や性格は幼いものの頭だけは良かった私はすぐに理解した。
私の体格では気付いても逃げきれないとわかった貴女が、身を呈して私を生かした、と。
貴女がいなくなって…あの人は変わった。仕事をしていない時はない位に仕事ばかりしていた。
もし私が気まぐれをおこさなければ…もし私が耐えきれていたなら……全てが、もしも' 話…それでも願わずにはいられない。
、私の命と引き換えで良いから…彼女を…お母様をかえして…'

…願いを叶えるためなら、何でもした。最初は勉強だった。
…気が付いたら世界の有名大学全て卒業していた。…でも、ムダだった。
その間にもファッション系の会社をたてたりもして…頭脳と権力を手に入れられたけれど…
無理なことがわかったので次は私の願いを叶える方法を探した。
探した結果は…裏世界Ｎｏ．１の情報屋の立場とその情報網。…それだけだった。
だから…自分で命を引き換えにしてでも…そう思って魔術を使おうとした。
魔力量、魔力純度、方法…全て完璧で量や純度に関しては有り余るほどで…問題はない。
なのに…成功は、しなかった。何度やっても…ムダだった。
それからは何もやる気が起きなくて…自分の部屋にとじ込もって自社の仕事等を処理して過ごした。
他にする事もなかったのですぐに世界Ｎｏ．１のファッション系会社になった。
Ｎｏ．１になったのと同時期…あの人が婚約者候補達を連れてきた。
人なんて…脆い。そんなのと一緒にいるのはイヤ…そうイラついて…
情報屋の姿で毎日暴れた。そうしてる間に…彼に会った。
人間も悪くない…そう思ったのに…彼は…あの人の部下に殺された。
何故彼を殺す必要があったの…？…そう、何度きいても…あの人は教えてくれなかった。
だから私は…逃げようと、思った。
そのための準備は出来た。お金の用意も…隠れる場所も決めた。
どうせすぐ見つかるけれど…私に関心のないあの人は暫くは放置するだろう。
荷物もまとめ…あとは、実行に移すだけ。

逃げと言うハジマリ

今まで生きてきて…現在…
私が今いるのは、日本の私立全寮制学園…の、上空。
私立神城学園…世界で最も有名で、偏差値の高い学園だ。
ただし…不良が多い。男子生徒は全員、族に入っている、と言われる程に。
財閥などの子息はストレスが溜まりやすいらしくよく族デビューするらしい。
きいた話だから詳しくはわからないけれど…
どんなところに誰がいたとしても。それには必ず理由があるわけで。
それは、この私でも例外ではなくあてはまる。
学校なんて面倒…だけど…ｒｉｏもいるし…何より条件をクリアするのがここしかなかったから…
不良が多い、と言っても流石私立、と言うべきなのか。
…窓ガラスが割れていたりはしない。
……ちょっと見てみたい気持ちもあったんだけどなぁ…
まぁ、それはおいといて…
上からみたかぎりでは落書き等もない…ようにみえる。
まぁ、窓ガラスが割れていたり落書きがあったりしたら私はここに来なかったけれど。
後ろにチラリと視線を向けて執事をみると私は「じゃぁね」と言って…ヘリから飛び降りた。
風雲魔法を使って緩やかにヘリの真下にあった学園長室へとおりていく。
ホントはヘリポートを使えば良いんだけれど…
今回は事情が事情だから突然で連絡もしていない…非はこちらにある。
あいていた学園長室の窓へと入って…窓枠に腰かけた。

私の前には学園長…神城紗綾が呆然とした表情で突っ立っている。美人はどんな表情でも絵になる…って、これは醜い私に対しての嫌みなのかしら…？

「……ハァ…」

あら、ついため息を…って、何故かもっと驚いたような顔に…その状態で１０分程…

「……ハッ…！！あ、貴女は？私は神城紗綾。この学園の学園長よ」

ワタワタしながらスゴく早口で話された…な、何なのでしょう、この人は…まぁ、良いわ。

「私は黒蘭優妃。ねぇ…何で貴女侵入者に対してそんなに無防備なの？」

きかれた事には一応答えて先程からずっと思っている事をきいた。和風美女の紗綾…親子揃って美しいのね…あぁ、羨ましい…

「へ…？…あぁ、この学園には私より強い魔力の持ち主が結界を張っているの。それをワザワザ維持して壊さずに入ってきただけって事は、私が挑んでも勝ち目は欠片もないし…これは私の勘だけれど…私や他の人達に危害を加えるつもりもないでしょう？」

ニコニコと笑顔で言う紗綾…やっぱり美人は笑顔が一番、ね。

「……って、そんな事言ってる場合じゃないわ！今日は…３月２９日…だから…あぁ、４月４日だ！コレ…」

本題を忘れかけていた私はそう言って紗綾にある物を差し出した。

「コレ…って…小切手…？」

そう、私が紗綾に差し出したのは無記入の小切手。

「この学園に通わせて欲しいの。授業とやらはサボるけど…成績は大丈夫よ。６歳の頃には世界の有名大学全てを卒業したから」

通わせて欲しいと言うよりは匿って欲しい、に近いけれど…私にとっては通わせて貰うだけで良いのでそう言った。

キョトンとした顔の紗綾に、私は続ける。

「とりあえず、五億、寄付する。そこから3年分の学費とか諸費をさっ引いて私の処遇を決めて。それ以外にももっと欲しいと言うのならこの小切手に幾らでも記入してくれて構わないわ」

……さて、受け入れてくれるかしら…？紗綾が口を開く。

「…わかったわ。小切手の方はいらないけど」

……良かった…ダメだったらどうしようかと…まぁ、良いわ。

「…ありがとう…じゃぁ、とりあえず…ハイ、コレ五億」

バックから札束を少しずつ取り出して…コレで、全部で五億。…足の踏み場がなくなったわ。

魔法で邪魔にならないように積んでいく…その間に紗綾は学費等の計算をブツブツと呟いている。

「学費は1ヶ月に80万…1年で960万…3年分にすると2880万で…教科書とか制服の諸費だと…制服は両方のタイプをそれぞれ…10着ずつで十分かな。3年分でも余裕で…金カードの他の条件の…魔力もクリア…と」

私が積み終わった頃には紗綾の方の計算も終わっていた。

「あ、優妃さんはたくさん寄付くれたので扱いが違うのだけど…って、もう既に全て調べて知っていそうね…でも、一応きいて？」

苦笑いで的確な答えを出した紗綾は机の引き出しから金色のカードを取り出した。

そのカードには文字も、模様も、何もなく…簡単に言うなら…金の板、と言った感じだった。

そのカードに手をかざしながら紗綾は説明を始めた。

「えっと…調べてきたかもしれないけど…この学園は特殊で、様々な条件によって一人一人に必ずランクがつくの。その最高ランクが、金。1年に1500万以上の寄付を自力ですること。そして高等魔術師並かそれ以上の魔力と才能をもつ事が条件なの。優妃さんはそれを二つとも余裕でクリア。ランクによっては立ち入りが制限される場所もあるんだけど…金にはないの。例えば…銀ランクの子が私の許可なくこの学園長舎に入ったりしたら退学になる事すらあり得なくはないのに対して、金は全然ｏｋ。まぁ…簡単に言えば金以外の子達は制限があったりするけど金は自由、と言う事ね。あとのランクは…ランクをつけなくて良い普通な子達、と言う感じかしら？そう言うタイプの子達は学年ごとのランクよ。…優妃さん飽きてるしコレは詳しく説明しなくて良いわね。…えーっと…優妃さんは金だからカード、制服の色、寮の広さや内装が他の子達とは違うの。カードは金、制服は全員メインは白なのだけれど、色のつくと

ころはランクカラーになってるの。で、寮は…学園の寮で最も広く、豪華。でも、教室等は一般生徒と同じよ。サボるのは構わないけど…自己紹
介だけはしておいて？そうじゃないとめんどくさい事になるかもだから…まぁ、そう言う事で…女子用制服は二種類あるから好きな方を着て？それぞれ十着ずつ用意するように頼んでおくけど…今はとりあえずスカートの方しかないわ、ごめんなさい…とりあえずはコレを着て？コッチはカード。…女の子で金は久しぶりだわ」

手をかざしていたカードと制服？を私に差し出してきたけど…その制服は言っていた通りに白がメインだった。ところどころにランクカラーが入っている。
白いシャツに、ランクカラーのラインが裾にある白いスカート、そして袖と裾に同じくランクカラーのラインがある白いカーディガン。

「奥で着替えてきて？その間に案内の為の息子呼ぶから…同じランクうちの息子しか今はいないのよね…」

紗綾は私が制服とカードをしっかり持ったのを確認すると奥の部屋に押し込んだ。
押し込まれた私はとりあえず制服は着たがボタンは上二個をはずした。
私は着替え終わったのでまた紗綾のいる部屋に戻った…キョトン。と目を見開く紗綾…固まって動かない。かと思ったら我にかえったようなので気にしない事にした。

「あ。そろそろ来るわ、私の息子」

紗綾がそう言ったと同時に学園長室…この部屋のドアが開いて…
私にとってとても見覚えのある美形が入室してきた。

彼は…金髪に白メッシュで碧眼の超絶美形…なんか、機嫌悪そう…
私が視界に入った彼は珍しく表情が出た。目を見開き私を見る。
「Ｈｅｌｌｏ？ｒｉｏ♪じゃなくて神城玖音ね？仕事は順調？」
みられた私はニコッ…と笑顔で彼…玖音に言った。
無表情ながらも何か言いたげに私を見つめる玖音に、口元に手をあてクスクス笑いながら言葉を続ける。
「玖音？４月からこの学園で過ごすから♪ヨロシク♪」
私の言葉に納得の表情になる玖音は、自分が呼ばれた理由まで察したらしく、いつもの無表情で私に近付いてきた。…と、そこで紗綾が問うてきた。
「２人って…知り合いなの…？」
コテン…と首を傾げてきく紗綾に私達の注意が向いた。私達は顔を見合わせ、口を開いたのは…私。
「私、玖音の雇い主なの」
とりあえず質問に答えただけだが。紗綾は納得したらしく何故か嬉しそうにしながら私達を学園長室から出した。…アレ、そういえば…
「玖音。今は春休みとか言う期間なのでしょう？何故制服を着てるの？」
そう、春休みの筈なのに…何故…？どんな服でも似合うくらいの美形な玖音…は、やっぱり似合っている制服を

上のボタンは私と同じく二つあけ、何気にキチンと着ている。…まぁ、中に校則違反の黒いシャツを着てはいるけれど。

「……学校…行く…予定」

口数の少ない玖音は眠いらしくいつもより饒舌だ。答えた後は私の手をとり歩き出した。

「…あ。ハッキングして学園の図は頭に入ってるから案内ならしなくて大丈夫よ？」

首を傾げて言う私に玖音はチラ…と視線を向けて、一言。

「……仲間…」

…コレだけで玖音の言いたい事が何となくわかる私、スゴーイ。

「…神龍のメンバーを私に紹介したいのね？」

そうきいた私に、少し嬉しそうな、けれどどこか嫌そうな複雑な顔で玖音は頷いた。
彼は私の手をひいたまま学園長舎からでて、学園長舎前の、バス停擬きに近づく。
バスの時間を確認したらしい玖音は、また、一言。

「……2分」

…どうやらバスはあと2分後に来るらしい。
玖音は私にそう言うと、腕を組んでバス停に寄りかかった。
…やっぱり美形は何をしてもサマになる。

「……美形ってトクね…」

思わずポツリ。と小さく呟くときこえていたらしい玖音に超怪訝な顔をされた。

ちなみにこの学園には広すぎるためにバスが運行している。それが故に今の会話である。

…暫く待つとバスが見えてきた。と、思ったら何故か私にサングラスを押し付けてくる玖音。

何かと思って玖音を見上げると、今度は目元につきだされた。

…どうやら玖音は、つけろ、と言いたいらしい。何故に…？と思いながらも指示通りにつけると…超！！満足そうだった。

そうこうしているうちに私達の前にバスがとまる。乗り込む玖音に私も続く。

乗っていたのは、運転手、男子生徒3人と女子生徒5人。

女子生徒は玖音の姿が目に入ると騒ぎはじめた。…あぁ、五月蝿い…男子生徒は尊敬の眼差しを向ける。

が、後ろに続く私をみつけると、全員がその顔に驚愕の表情を浮かべた。

そして…微動だにしなくなった。…私はメデューサではないのだけれど？何故…？

玖音は楽しそうにしてるから…理由わかってるわね…でも多分…きいても教えてくれないわね、コレは…

とりあえず玖音が常人にはわからない程度に楽しげに座ったから私もその横の席に座った。

私が座ると同時に、バスは動き出した。

気になる事がある私は紗綾から受け取った金カードを出した。と、同時に玖音の携帯が震える。

私は玖音に顔を向けて、玖音は届いたメールを読む。…と、読み終わったらしい玖音はため息をついた。

「…カード…自分…」

そのまま私にそう言った玖音は私の持っているカードを顎で示す。

「あぁ、そう言う事か…ＰＣで良いのよね？」

私が気になっていたのはこのカードのデータについて。
私がみているかぎりでは紗綾はカードに私の名前をつけることしかしていなかった。
なのでこの状態では使えないのでは…？と言う風に気になっていた、と言う事。
丁度玖音のメールが紗綾からのその事に関してだったのでこんな流れになった。
私は私の問いに玖音が頷くのを確認するとＰＣとカード用の機器を取り出した。
接続するとデータの入力を開始。…が、さほどかからずに終わった。
ＰＣとカード用の機器をしまった私は玖音がじっとみているのに気がつき、眉を寄せた。

「……いつも…早い…」

玖音はそう呟いてから前に向き直る。
先程まで固まっていた生徒達は、私達２人をみてコソコソと何か言っているがあまりに小声のため聞き取れず、私をイラつかせた。
……言いたい事があるならはっきり言えば良いのに…ムカつく…

学園の絶対的存在達、腹黒と女嫌いと関西弁

バスから降りた私と玖音…今は2人で高等部校舎の前に突っ立っている。

「……小さくて狭そうね…イタッ！！何で叩くのよ、玖音！！」

私が心情を吐露したら叩かれた。しかも何かカワイソウなものをみる目でみられてる気が…

「……充分広い…」

…どこが広いんだろ…私の会社の十分の一もないじゃんか…ま、いっか！！

「とりあえずココが高等部校舎なのは知ってる。ココで何かあるの？」

私は首を傾げて当たり前だと思われる疑問を言う。

「……屋上…」

あぁ、なるほど。どうやら会わせたい仲間が屋上にいるらしい。と、思ったら、玖音は自分のカードをとりだし校舎入り口の機械にかざした。ピッ…と言う音と同時に扉が開く。

玖音は校舎に入るとそのまま奥のエレベーターに乗り、2人で3階に上がった。玖音はどうするつもりなんだろう…と思いながらもエレベーターをおり歩く彼の後に続く。

玖音はエレベーターから一番遠い教室の入り口の機械にカードをか

ざすと、中へと入る。確かココは…高等部校舎金・銀ランク専用休憩室だった筈だ。
何故こんなところに…？と思いながらも玖音に続いて中に入ると、玖音は既に奥へつき、私を待っていた。
玖音は部屋の奥の本棚の本を数冊引き抜き、カードをその奥に…
玖音が手を引くと何とも古風な仕掛けで…本棚が動いた。おもしろーい…

「ぉぉ…現実にこんなの存在するんだぁ…」

と、ボソッと言ったら妙な目でみられた。何で…？私、そんな変な事言ったかしら…？
私を見遣ったあと、動いた本棚のあったところの奥の空間に入る。
私もそれに続き、中に入ると、本棚がもとあった位置に戻り、周辺に明かりがついた。
私達が今いるところ…本棚の…裏？奥？…は、階段になっており、明かりは恐らくセンサー式だろう。
私達が進む度に行く手に明かりが灯り、後ろの明かりは消えていくから。
暫く階段をのぼると、扉があった。玖音はその一見ごく普通にみえてその実、取っ手のない扉に手をかざした。階段の明かりとは別の明かりがさす。

「おっ！！珍しなぁ～。キチンと来たやん！！」「珍しいね…指定時間前に来るなんて…」「明日は…嵐、か…？」

玖音が開いたその扉の先からは、そんな言葉がきこえてくる。
恐らく丁度玖音によってみえないであろう私に全く気がつかない３人…玖音が総長をつとめる世界Ｎｏ．１の族、神龍のメンバー…

・副総長：龍宮幸
・幹部：皇樹咲夜
・特攻隊長：蘭川菊也

彼らは様々な意味で有名な族、神龍を、総長である玖音と共に１５歳でまとめあげ、世界Ｎｏ．１にした後、その状態を今尚保ち、世界中の不良を黙らせる…言わば不良達のカリスマ的存在だ。
玖音へ無遠慮な言葉をはいた後、ようやく玖音の後ろに私がいるのに気が付いたらしく、黒髪白メッシュでメガネの爽やか美形…龍宮幸が玖音に声をかけた。

「玖音？後ろの人は…」

私はその言葉に、実は幽霊です！！…とか言ったらどうするつもりかなぁ…と思いながら自己紹介をする事にした。

「Ｈｅｌｌｏ♪玖音の雇い主、Ｂ＆ａｍｐ；Ｗの社長で裏世界では情報屋黒姫として活動もしている黒蘭優妃よ♪ヨロシクしたい訳じゃないケドとりあえず玖音が無言でスッゴい私をみてるからとりあえずヨロシク～♪」

ピョコッ。と玖音の背中から出て今の言葉をニコニコしながらいっきに言い放った私は、３人の唖然とした表情を眺めていた。
それにしても…やっぱり美形と言うのはどんな表情をしていても美しいのね、羨ましぃ…！！
３人とも、タイプは違えど皆美形だもの…
……と言うか、３人はいつまで固まっているのかしら…？玖音は楽しそうにしてるだけで状況改善の意思がみられないし…

「……ハッ…！！」

あ、一人正気になった…？容姿は可愛い系の…皇樹咲夜、ね。

「お…女ぁーッ！！」

うわっ！？イキナリ叫ばないでよね…！？てか、いつのまにかスッゴい遠くにいるし…風雲魔法ね、この異常な早さは。

「玖音？何故、彼女をココに？」

彼の叫びに正気になったらしい幸が玖音にきく。

「……違う…」

……玖音は私をみて言った。どうやら眠いので自分で話すのは面倒らしい。

「玖音は、私は他の女とは違う、と言いたいらしいわ。ま、確かに他の女の人の方が美しいもの。私と比べる方が悪い位に♪」

私が玖音の言いたい事を言うと、玖音はため息をついた。龍宮幸と皇樹咲夜はいつのまにか正気にかえっていた蘭川菊也とポカーン…としていた。

「……いつもの事…」

ポツリと玖音が呟くと、皆呆れた表情になった。

「……紹介…」

私をみてまた呟いた玖音…あぁ…

「全員知ってるわよ？彼が龍宮幸…神龍副総長にして…あまり言いすぎない方が良さそうね…彼は皇樹咲夜…神龍幹部…彼は蘭川菊也…神龍特攻隊長ね。全員上流か…」

1人ずつ手で示して言う私…玖音はため息をついていたけれど…気にしない♪

「まぁ、黒姫としてではなくてもわかる事の方が多いけれど、ね？」

まぁ、そんな事はどうでも良いだろう。今は玖音の機嫌の方が重要だ。よほど眠いのだろう…身に纏うオーラ？が、黒くなっている…

「じゃ、玖音…行きましょうか…眠いみたいだし…」

さっさと行こう、さぁ行こう。と思って発言。

「あ、ちょっと待って！！用事があるんだけど…」

幸の言葉に行くの？と言う意味を込めて玖音を見上げる。コクリ。と頷いたので行く事が決まった。

「ところでどこいくの？」

学園外に行くらしく階段を歩きながら問う。

「ん？秘密♪行けばわかるし、ね？」

ニコッ。と笑顔で幸に答えられた。え～…

「行けばわかるなら…今教えてくれたって良いんじゃない？」

私もニコッ。と笑顔で幸に返す。

「教えちゃったら面白くないじゃん？」

イヤ、私におもしろさを求められても…

「私、あなた達に面白さを提供するためにいる訳じゃないんだけれど？そしてあなた達が行ける場所なんて私、１つしか思い浮かばないんだけど？」

２人とも笑顔で会話していて私の言葉には答えず幸は電話をしだした。別に答えを求めていた訳じゃないから良いけどね。幸もわかってて電話しだしたっぽいし。

と言うか…いつの間にか校舎の外に出ていた。丁度良く来たバスに乗り込み、学園から出る門へ。

バスから降りると…車。恐らく幸が電話したのはこのためだったと思われる。その車に乗り込むと車は緩やかに走り出した。

「そう言えば、黒蘭優妃さん…だっけ？何て呼べば良い？」

う～わっ！！超どうでも良い…！！

「別に何て呼んでくれたって構わないわよ？黒蘭優妃の名前で呼ぶ人はいないからあなた達の誰が呼んだか分かりやすければ」

どうでも良いので返答も適当。そして隣に座っていた玖音の頭を私の方へ傾けて…私の膝へ。

玖音が疑問を目で訴える。

「だって、眠そうだったんだもの」

クスクス笑いながら言うと玖音は納得したらしく、私の膝の上で目を閉じた。

私はそんな玖音の髪にサラサラと指をとおしながら頭を撫ではじめた。

撫でていると微かながら寝息をたてはじめた玖音…顔をあげると3人が信じられないものをみる目で私達をみていた。え…何故？

「どこにそんなに驚く要素あるの？」

思わずきいた。イヤ、だって気になるし？私がきいたのをはじまりに3人がいっぺんに話し出した。

同時説明を玖音の頭を撫でながら纏めると…

・普段無表情しかださない玖音の表情

・人のいるところで眠ると言う無防備な行動

……この2点に驚いた、とのこと。そんなに驚くようなことかしら…ま、いっか。

と言うか…そろそろつく頃なのよね…彼らの目的地に…

「…ついちゃった、わね…」

玖音が私の膝から起き上がり、車を降りる。私もその後に続き、全員が降りると…車は走り去った。

そして私の予想が大当たりな彼らの目的地…思わず声がでる。

「やっぱり…神龍倉庫…」

神龍とその媛、そして媛と龍のシルラヴァナンロートリアス

……いろいろな意味で有名な族、神龍…そのいろいろな意味、と言うのが…

・神龍全員が種類は違えど美形男子。

・一番の下っぱでも他の族の幹部以上に強い。

そして、最後に…神龍は、何らかの理由で、全員…

「「「お…女ぁー！？」」」

…女嫌い、だ。神龍のメンバーは会社の子息だったりするから金持ちだし、美形なのでそれらのステータスによってくる女どもに嫌気がさして嫌いになった、と言うのが主な理由だろう。

「……うるせ…」

ボソッと玖音が一言呟くと、一斉にシーン…となった。わぁ、すご～い…つかおもしろ～い…

「彼女は黒蘭優妃ちゃん。彼女は玖音がつれてきた女の子で…情報屋の黒姫らしい」

幸が前に立ちそう言うと驚いたような声があがった。

「……優妃…媛…」

……族にはそれぞれの媛と呼ばれる人がいる。一般的には総長と最も親しい女性…基本的には彼女など…がなるものなのだが…

玖音は私に、なれ、と言いたいらしい。イヤ、彼女じゃないし。…雇い主だから…？それとも女嫌いだけど私はマシだからかなぁ…
媛は、他の族から狙われる可能性も高くなる。そんなのはどうにでも出来るから良いのだけれど…
神龍は世界Ｎｏ．１なのと同時に女嫌いで有名な族…普通の族より何倍も注目されるはず…それは少し困る。
私は微かに顔をしかめた。玖音は常人にはわからない程度に顔を歪めてメンバーの前に立つ。……本気、なのかしら…まぁ、死ぬ訳でもないし、いっか…

「俺は、優妃を媛にしたい。認めて、貰えないだろうか」

玖音はメンバーを見回してから頭を下げた。私以外の全員が唖然。おそらく、玖音があれほどに長い文章を喋ったことと、頭をさげた事に驚いているのだと思う。
私もビックリ。まさか頭をさげてまで媛にしたかったとは思わなかったから。

「…良いわ、玖音。彼らに頭をさげてまで私を媛にしたいなら、私が言うわ。まさかそこまでとは思わなかった」

私がそう言うと、神龍のメンバー達が唖然とした表情に。多分…あくまでも多分だけど…私が玖音を呼び捨てした事に驚いているんだと思う。
私は全員の顔を見回した。…何人か…潜んでいるようね。世界Ｎｏ．２と３…同盟でも結んだのかしら？

「…玖音。Ｎｏ．２と３が何人か潜んでる。ついでに追っ払っとくわ」

コソリ…と玖音に言った。やっぱり気付いていなかったようで、眉をしかめて彼らのいる方をみた。
ま、私達は今来たばっかりだから気付かなくても仕方ないかしらね。それに結構厳重な姿隠しの魔法がかけてあるし…ついでに玖音は見回す余裕を私をメンバーに認めさせる方に回してたもの。
私は神龍メンバーの頭上をとんで彼らの方へとぶ。彼らの前につくと、総じて驚いた表情。

「お前ら、世界Ｎｏ．２と３のスパイでしょう？最近ハッキングしてないからアレだけど…何？同盟でも結んだわけ？」

空中に浮いたままニッコリと満面の笑顔で彼らに言う私に…彼らはスッゴク驚いているらしく、目を見開いている。
私はＰＣをとりだし、光雷魔法を使って起動し…世界Ｎｏ．２と３の情報をハッキング。パスワードは…と…よし、出来た。
お、やっぱり…同盟結んでるわね…ニッ。と笑った私は、彼らにその画面を見せた。当たり前だけど彼らはかなり驚いた表情になる。

「…私、黒姫って呼ばれてるの。黒姫は神龍につくわ。玖音とは前からの知り合いだし…お前ら、私と玖音が組んだからにはどれだけ頑張っても勝てないと思っていてね？私は黒姫…情報においても、力においても、私は負ける気がしないわ」

相変わらずフワフワと浮きながらニッコリと満面の笑顔で彼らに言うと、彼らは顔を真っ青にして倉庫からさっさと逃げていった。
……う～わ…無様、ね…フッ…と、鼻で笑っておいた。

「玖音。アレは追わせずに泳がせて私が玖音…いえ、神龍につくと言う情報を流させた方が良いわ。私が神龍メンバーに認められなくても私は玖音につく。……彼奴等には玖音にすら気が付けないほど

の姿隠しの魔法がかかっていた…何故それほどに強力な魔法を使用出来たのか…それが気になるのよ…」

ＰＣをみつめながら言う私に追わせようとしていた玖音は、私をみて頷いた。そのまま私の手をとり、倉庫の目立つ場所へ。話せ、と言いたいらしい。

「……はぁ…私が今追い出した奴らは、世界Ｎｏ．２と３のスパイよ。奴らを逃がす理由はその方が情報を流す手間が省けるから。まぁ、いろいろな訳はあるのだけれど…とりあえず私自身は媛になる事は了承する。けれど…いきなり現れた私が媛になるのには納得がいかないでしょうから…選定期間をもうける、と言うのはどうかしら？その間に貴方達が認めたら私は今後もココに出入りする。認められなかったら…そうね。今後、私からは関わらないと約束するわ」

私は神龍メンバー全員にきこえるように宣言した。メンバー達はガヤガヤと話だし、やがて代表らしき人物が前に出てきた。

「俺は特攻副隊長の成瀬秋斗。下のメンバーの中で一番上の地位にいます。俺らに、あなたが媛になる事に対して異存はありません。総長がわざわざ頭まで下げていましたし…総長は神龍の中で一番の女嫌い…なのにその総長が認める程の人なのだと思います。そんな人を認めない理由もありませんから」

キッパリと言い切った彼…成瀬秋斗に、私はきょとん。と眼を見開き、メンバー達は賛同の声をあげた。流石の私も…少し、予想外だわ…

「……決定…」

成瀬秋斗の言葉に、珍しく表情をだし、ニヤリ。と笑って玖音が言った。何か…楽しそう、ね。

「我らが総長の決定だ。キッチリ彼女をまもらないと、ね」

玖音の言葉に、何故か幸が少し…イヤ、かなり楽しそうにしているのが何故なのかは謎だ。嫌な予感がするから知りたくないけど。

「……本当に…こんなので良いの？」

私は躊躇いがちに幸にきく。だって…今日来て今日決まるなんて…はやすぎる気が…

「あぁ、良いんだよ。結局特に何かするわけでもないし…だって優妃ちゃんは神城学園の生徒でしょう？神城学園の中でまもる必要はないし…媛を決めるのに必要なのはメンバーの了承だけだから」

私の質問にニッコリと笑顔で答える幸…幸がそう言うなら…良いわよね。

「……上…」

……いい加減私に通訳させようとするのやめてくれないかしら、玖音は…

「…はぁ…玖音が上の階行って休むってさ…」

ため息をついて私が通訳すると、玖音は奥の階段とエレベーターの方へ歩き始めた。

私は玖音に続いて歩き出し…幸達は私達と一緒についてきた。

玖音はエレベーターに乗りたかったみたいだけど…たまたま私の気分的に階段がよかったので、勝手に上がっていったら、ちゃんとついてきてくれた。…ダルそうだけど。
階段を上がって暫く通路を歩く。通路には扉があって、それぞれの扉には役名がかかれたプレートが掛かっているので、個人専用の部屋だろう。一番奥…総長や幹部専用らしき部屋の前につく。この部屋は上役全員が過ごす部屋のようだ…
部屋の扉を玖音が開け、スタスタと机を囲む椅子の一番奥の総長専用のソファへ向かい、当たり前だけど堂々と横になった。…寝るのね…
幸は、部屋の奥の方のＰＣがあるところへ。
咲夜は部屋に入ってすぐ横にあるＴＶで、ゲームをするようだ。
菊也は机を囲む椅子のひとつの…手前の椅子へ。
私は…どうしよう？…突っ立っていたら、玖音が気付いてくれた。
玖音は椅子から立ちあがり、こちらへ向かってきた。
私の元に来ると、手をとって総長専用のソファーの端に私を座らせ…自分は私の膝に横になった。……そんなに膝枕が気に入ったのかしら…？でも、フカフカで座り心地良いわ♪
眠たげな玖音…あら…

「玖音…私が渡したペンダント…まだ…」

昔…一番最初に会ったとき、玖音に渡したペンダント…今の玖音には必要ないはず…なのに、まだつけたなんて…
私は自分の胸元にある、大きな瑪瑙を使ったペンダントをみた。私がつけている瑪瑙のペンダントも、玖音がつけている瑪瑙のペンダントも、元は私の両親のもの…このペンダントは少し特殊で、魔力の量を調節して、余る分を貯めておく。そして後々、魔力量に余裕が出来た時に、魔力を体に戻す。
生まれつき魔力量が多く、魔力増加体質でもあったので、魔力が多

すぎる時におこる魔力爆発を防ぐために、お父様とお母様が自分達のペアのペンダントを私に両方つけたらしい。
成長して魔力の器にペンダントに貯まっていた魔力がおさまりきった頃に玖音に会って親が封印の道を選んだらしい彼の封印を解いて、魔力爆発を防ぐために彼にペアの片割れ…男性用を渡した。でも…まさか、今もまだ持っていてくれたとは…

「…玖音。何か嬉しくなった、から…給料、増やすわ」

フフッ…と笑いながら玖音に言った。玖音は少し驚いていたけれど、どうでもいいらしい。うっすらと開いていた眼を閉じた。
まぁ、玖音は月に１８０万の給料の内の１７０万を学園に寄付しているし、ね…年にして２０４０万の寄付…余るのは月に１０万だから年にしても１２０万しかないし…
じゃあ…どうしよっかなぁ…よし、月に２００万にして、年に２４００万にしよう！！余りは３６０万♪

「…うん、決定！！玖音の給料は来月から２００万よ！！年に２４００万♪玖音、月に３０万が実質自由な金額…年に３６０万…ｏｋ？もっと増やそうか？」

いきなり叫んだからなのか何なのか…部屋にいる全員に驚かれた。

「玖音の給料すごいね…モデル…だっけ？１４歳に始めたんだよね？確か、神龍に入る少し前…？」

幸がＰＣに向けていた体をこちらに向けて、問う。

「モデルの方が数ヵ月はやい程度ね、確か。ストレス貯まっちゃった玖音に族に入って暴れた方が効率良いわよ？って、進めたの。面

白そうだなぁ…ってね」

とりあえず答える。何かを考える目になる幸…

「…ねぇ、優妃ちゃんの下の方の人だと給料いくら位になる？」

私をみて再び問う幸…何で…？別に良いけど…

「ん～…モデルなら、月に５０万位、カナ？」

…問われたから答えた。

「う～ん…いっぺんに１０人位雇えないかな？」

……え～っと…これは、もしかして…

「モデル、やりたいの？」

…何か、話の流れ的に…

「う～ん…まぁ、そんなカンジかな？正確に言えば…働きたいって言うか…この倉庫、倉庫って言うより超デカイ家みたいでしょ？お金の方も高くなるわけ。それを紫音さん…玖音のお父さんに払って貰ってるんだ。でも、そういうのは悪いでしょう？だから、って思ってね」

わぁー、幸君腹黒の癖にまっじめー！！…あは。

「ふ～ん…良いよ、面白そうだし♪丁度良かったのもある。また新しい事業やろうと思ってたからね…芸能事務所でも作るかな♪うち

…Ｂ＆ａｍｐ；Ｗはファッション系だから必然的に女性社員が多いの。新しく作った方が良いでしょ♪」

多分幸はファッション会社だから女性社員が多い事を考えて１０人、と言ったのだと思う。

「優妃ちゃんには敵わないな…」

幸は困ったように笑いながら私にそう言った。

「さて、そうと決まったら行かなくちゃ♪玖音も行く？」

ニッコリと笑顔で膝の上にいる玖音に問う。

「え、どこか行くの？」

きょとん。と疑問な幸…

「ん？あぁ、手続きとかしにＢ＆ａｍｐ；Ｗの本社の方へ行くのよ。一緒に来る？さっさと済ませた方が楽だし？」

片手に玖音の手をとって立ち上がる私は、幸をみて、そう問いかける。

「面白そうだから行せてもらおうかな」

幸がそう言ったので行く方法を考える。

「…バサバサとんでいくのと、一瞬でつくのと、フワフワとんでいくのと、びゅーんってとんでいくの…どれがいい？」

思い付いた方法を首を傾げながら全員に問う。

「「「何でも良い」」」

わ、スゴいハモり…玖音は無言だけど。

「じゃあ…バサバサとんで行こーっ♪」

バサバサ飛ぶためにはスペースが必要なので倉庫の前へ移動。玖音達より一歩前へでて…すっ…と手を前にだす。

「［発現］［接続］［起動］…あ、いたっ！！［召喚］！！」

［発現］で巨大な魔方陣が出現し、［起動］で発現した魔方陣が起動の光を放つ。そして［召喚］で…巨大な銀色の美しい西洋型の龍が現れた。

「えっ…！！龍なんて…危ないんじゃっ…！？しかも銀って長の色…！？」

幸の焦ったような声がきこえる。眼を閉じていた私はゆっくりと眼を開き…

「久しぶり♪シヴァ♪」

ニカッ。と笑った。

「［久しぶりなのは良いが…いい加減に名を縮めるのはやめんか…儂にはシルラヴァナンロートリアスという立派な名があるのだぞ］」

半目で私を睨む龍に近寄っていく…と、頭を撫でられた。

「ちょっ…！！頭撫でるなら人型になってよね！？縮むっ！！」

私がそう言うとむ。と言って人型になった。長い銀髪に銀の眼の妖艶な美青年に。うっわぁ～…私の身の回りには何でこんな美形しかいないのかしらねぇ…まぁ、もう良いわ…諦めた。

「見上げるのにも疲れるから丁度良かったわ…Ｂ＆ａｍｐ；Ｗの本社に行きたいの。久しぶりにシヴァにも会いたかったから喚んじゃったんだけど…ダメかしら？」

ナデナデと私の頭を撫で続けるシヴァを見上げて問う。

「うむ？別に良いぞ。儂はルナを気に入っておる。龍珠を預けても良いのに…」

龍珠とは龍に一つは必ず持っている、龍の命に等しいもの。それが奪われると奪われた龍は活動が出来なくなる。しかし、龍本人が望むことで、他の者に龍珠を預ける事が出来るのだ。龍珠を預かった者は、龍珠の持ち主の龍と、命や魔力など様々なモノを共有する事になる。龍の寿命は大変長いので龍珠を奪おうとする人間も多く、数のせいで命を落とした龍もいたそうだ。酷い時は一人の龍に対して５万でかかった、等…

「はぁ…毎回毎回同じ事言っててよく飽きないわね…第一、龍珠を渡すのは同じ龍族か、他族ならその龍が美しいと思わなきゃダメでしょうが。私はどっちにも当てはまんないわよ…」

ぺしっ。とシヴァの手を払って言う。

「何を言うか。ルナは充分に美しいぞ？」

うぅ～わ…もう良いわ…シヴァについては諦めよう…

「……もう良いから送って頂戴…」

イヤになったのでそう言うとシヴァは…私を抱き上げた。しかも姫抱き。

「……は？」

目が点になる、とはこう言う事だろうか。何故抱き上げる？

「いきなり喚ばれたからな。鞍を持ってきとらん。部分変化で翼だけでとぶ」

……もう、良いわ…玖音達を魔法の球体で包み込み、球体から魔法の糸を私に繋ぐ。これでｏｋ。

シヴァがとぶ。と、私は抱えられているので必然的に私に繋がっている糸の先…玖音達も浮く。

そうして数分…Ｂ＆ａｍｐ；Ｗについた。

シヴァにしては気を使ったらしく玖音達が家などに当たらないようにかなり上空をとんでいた。

「ついたが…暫く共にいても良いか？」

翼をしまい私に向き直ったシヴァが言った。

「構わないわよ？でも私今学園に通ってるんだけど…」

きょとん。と言う私…

「ならば儂も通おう」

……予想外だわ…

' 静' 店員天稀刹那

……結局シヴァは学園に通うらしい。今はｍｉｎｉ龍になって私の髪の中に入っている。ちなみに私は現在準備運動中。……会社の中は結構全力で走るからね…

「さて…久しぶりに結構本気で走んなきゃな…」

ポソッ。と呟いた私に意味がわかっている玖音とシヴァ以外はハテナ顔…玖音とシヴァは呆れ顔…まぁ、わからない方が良いとは思うけどね…これから嫌でもわかって貰うけど。

「じゃ、みんな頑張って走ってね？」

そう言うが否や私は目に見えないのではないかと言う速度で走りだした。本社のドアが開くのを待つ暇もないので魔法を使ってすり抜ける。

「今のは…！！」「この会社に張られている結界を通る事が出来るのは…結界を張った社長本人か、許可書を貰った社員か、社長が直々に許可した人のみ…」「私達の前を目にも止まらぬはやさで走るのは」「「「社長っ！！」」」

うわぁっ！？もう追いかけてきたぁ！？こ、怖っ！！

「今回こそ社長の美しさを目にしてみせる！！」「あたしがっ！！」

「何言ってんだ、俺だっ！！」

……うわぁ～……変な争いしてるよ…どっから私が美しいなんて出てきたのかしら…実際に会った事がある社員だっているのに…
まぁいいや。さっさと社長室へ走っていく。…半力疾走ってカンジかな？まぁとりあえず無事に社長室へついた。多分幸達は玖音が案内するだろうと思うので放置。
社長机の元へ行き、バックから鍵をだす。バックからだした鍵を机の引き出しの鍵穴へと差し込み、引き出しをあけた。
大量の書類が入っているその引き出しの奥の方へと手を突っ込み、取り出したのは…玖音の契約書。
私はその契約書を机の上におき、ＰＣをその横においた。そのままＰＣであるところにメールを送った。送り終わる頃に、やっと玖音達が社長室に入ってきた。
気にせずに次の作業へ。次は玖音達の契約書を作る。玖音の契約書をもとに作るので然程かからずに終わった。最後に秘書に詳しい処理はメールで頼んで…と。
丁度玖音が来たのでＰＣと印刷機を繋いで貰った。

「幸。幸からみて神龍の中でアイドルやれそうなのは何人位？」

視線を幸に向けた私は首を傾げて問う。

「あぁ～…２０人、かな」

問われた幸は、少し考えるようにしたあと、答える。私は頷いてＰＣに数を打ち込み…

「印刷、開始♪」

…と、言って、ポチっとな。的なノリでＥｎｔｅｒキーをおした。
すぐに終わったので、さっさととって一枚だけ抜いて幸へ渡す。抜

いた一枚は玖音へ。

「それは芸能事務所自体と契約するための契約書よ。玖音はその契約書の上半分だけでも良いのだけれど…まぁ別にかいても構わないけれどね？でももとの契約書で充分だしね…まぁいいわ。その１９枚はアイドルやれそうな人用。無理そうなのは後々渡すわ」

さてはてこの後どうするか…

「よし、お腹空いたからご飯食べに行こーっ！！」

ニッコリ笑って言った私は…窓から飛び降りた。

「っ！？い、いきなり飛び降りるでない！！」

一瞬後には私はシヴァの腕の中で再び姫抱き。てか何で毎回姫抱きなのよ…

「あは。良いじゃない別に。シヴァなら大丈夫だと思ってたし万が一があっても風雲魔法使うし」

玖音達を先程のように球体で包み込んで糸に繋いで引き寄せながら言う。

「それでもじゃっ！！万が一に儂が寝ていたら、そんな時に万が一に魔法が使えなかったりしたらどうするっ！！儂は…儂は二度とあのような思いをあじわいとうない…」

ぎゅううっ…と、シヴァに力一杯抱きつかれた私はたまらない。……窒息死するっ…！！シヴァがすぐに気が付いて解放してくれたか

ら良かったものの…
まぁいい。シヴァに行き先を指示する。私の不機嫌さを察したらしいシヴァは大人しく私の示す方向へ向かう。空をとぶと言うのは早いもので…すぐに目的地についた。
シヴァの腕から降りた私が目的地の店へと入っていくと、玖音達やシヴァも私についてくる。

「刹那？いるでしょ。出てきて頂戴」

店内はバーのようなつくりになっており、出入り口から左にはダーツやビリヤード、右にはカウンターがあった。私はそのカウンターの奥の扉へと言う。

「え！？ルナ！？え、い、あ、う、い、今行く！！」

叫んだわけでもないのに何できこえたのかとかはもう気にしないし。はぁ…とため息をついた私の耳に、ダダダダダッ！…と、階段を降りて行くようなものすごい音がきこえてきた。と、店…Ｂａｒの奥の扉が開く。

「ル～ナ～！！」

と叫んで開いた扉から出て私の方に向かってきた物体をひょい。と避けた私は、私に抱きつこうとして失敗した、少年と呼べる容姿の人をみる。相変わらず可愛いわねぇ…

「うぅ～…何で避けるのぅ、ルナぁ…」

私に涙目でそう言うのは、天稀刹那…この店の唯一の店員。ちなみに、この店のオーナーは私だ。

「ホラ、刹那。私達は客として来たのよ？あ、ちなみに私はいつものメニューで♪」

ニコッと笑って私が言うと、何かに気付いたような顔になり、立ち上がった。

「いらっしゃいませ、ルナ様、リオン様、シルラヴァナンロートリアス様…そちらは…リューア様、ナイト様、キルフ様…ですね。ようこそ、、静ｰへ」

ニッコリ営業スマイルで言う刹那…相変わらずきりかえはやいわねぇ…

「ふふ…冗談よ。普通でｏｋ。全員好きなもの頼んで？この子、何でもつくれるから。味は私が保証するわ。なんでも、ね」

クスクスと笑いながら言う私を戸惑いがちにみる幸達３人…しかし空腹に勝るものはないらしい。

「いつもの」

「フレンチトースト」「ハンバーグ」「チャーハンとラーメン」

玖音が言った事で決心がついたらしく、ハモるように言った。ちなみにフレンチトーストは幸、ハンバーグは咲夜、チャーハンとラーメンは菊也だ。…個性が出ている気がする。

「かしこまりました。ルナとリオン様はいつもの、リューア様がフレンチトースト、ナイト様がハンバーグ、キルフ様がチャーハンとラーメンですね。シルラヴァナンロートリアス様はどうなさいます

か？」

お辞儀をした刹那はシヴァに問う。

「うむ…儂は仙珠で良いぞ、キツネ」

再びお辞儀をした刹那はカウンターの奥の扉の中へと入っていった。
ちなみに仙珠とは龍族のおやつのようなものだ。龍族には特別摂取すべきものはないので食生活？は、気紛れである。
私はいつもと同じ席…扉に一番近い席にバックをおき、スタスタとダーツのもとへと向かう。
ダーツの矢を手にとると…ストレス発散開始♪ニコニコ笑顔で何故だか恐ろしいオーラを放ちダーツをする私に何かを感じたのか、玖音とシヴァ以外はビリヤードをしていた。
ちなみに玖音とシヴァはダーツをする私の後ろで突っ立っている。
何がしたいのかしら…的なら横にもう一つあると言うのに…
でも2人の視線なんて気にしていたらキリがないので、まるっと？無視をしてダーツを続けていたら…
料理が完成したらしい。
スタスタとカウンターの席へと向かい、座った。
と、同時にカウンターの奥の扉が開き、刹那が出てきた。
シヴァ、私、玖音、幸、菊也、咲夜…と、座っている順番に料理をおいていく。ちなみに料理名？で言うと…仙珠（珠）、サラダ、クロワッサン十個にサラダ、フレンチトースト、ハンバーグ、チャーハンとラーメン…だ。
……一つ人外が食べるとすぐわかるものがあるが、気にしない。気にしたら敗けだ。そんな気がする。
そして、臭いに釣られて来たらしい幸達ビリヤード組は、ふらふら…と、席につくと、手を合わせて「「「頂きます！！」」」声を揃えて言うと、がっつきはじめる。

モチロン、マナーは忘れずに。育ちが良いと体に染み付くものなのよね…マナーって…
玖音も「頂きます」と呟いてサラダを食べはじめた。私も玖音に続いて「頂きます」と言ってサラダを食べはじめる。ちなみにシヴァはさっさと食べていた。
私はサラダだけなので、さっさと食べ終えると食後の紅茶を飲みながら人間観察を開始した。
シヴァは…普通に指でつまんで食べてる…のに、どこか上品にみえるのは何故なのかしら…？
フォークでさして食べるわけにもいかないし、箸でなんてつまみにくい、そしてスプーンなんてのっからない…大きすぎて。
だから指で食べてるのに、何故なのか上品にみえる。しかも一粒？が大きいから大口あけて食べてる…なのに上品。
……何故なのかしら。
玖音は…何か、玖音自身の美しさと、食べ方…マナーの美しさによって、もうなんか…、完成された芸術！…みたいな？
幸は…マナーのお手本、ね。一ミリのズレもなくマナーのお手本をやってる…みたいな？……フレンチトーストをマナーのお手本で食べて形になるのも結構珍しい気がする…
菊也は…何でだろう。マナーはきっちりまもってる…まもってる…のに、まもってるようにみえない…！！何で！？食べてるもののせい！？
咲夜は…可愛い。何か…こう…厳しくしつけされた子供がしつけ通りに食べてる感じ？

「ルナはこの後どうするの？」

私が食べ終えて人間観察が終わった頃に話しかけてくるニコニコと満面の笑みの刹那…

「…あ、そうそう。私、暫く日本にいるわよ？」
その事を知らせようと思ったのもあってココに来たんだけど…スッカリ忘れてたわ。
「暫く日本に…って…僕は嬉しいけど…リュアル様は…？」
問いかける刹那に黙る私…でも…
「…あの人は…知らない筈よ。どうせすぐに居場所はバレるでしょうけれど…少なくとも5年は放置するはずだから」
まぁ、そんな事はどうでも良いだろう。
「まぁ、そう言う事だから…帰る」
空腹もみたされて満足したので帰る事にした。これ以上居座っても意味がないしね。
「ハイハ～イ♪また来てね？きっとだよ？はやくね？」
きりかえがはやい刹那は笑顔になってからだんだんと不安げな表情で言った。
「安心して。今回は次があるから。だから…バイバイ、じゃなくて…またね」
ニコッと笑顔で言った私に対し、フワッ…と笑顔になった刹那…可愛い…！！
とりあえず再び私はシヴァに姫抱きされ、私から4人を繋いで…繋

いで？

「ねぇ、どこ行くの？」

……行き先がわからないことにはどこにも行けない…

「とりあえず学園でｏｋだよ。他に行くとこないし」

私の問いかけに返答をくれたのは幸。何でも良いのでシヴァに指示をする。それなりに近いのですぐについた。

「ねぇ、幸？何でずっと笑ってるの？」

……キョトンとされた。……唐突すぎた…のかしら？

「優妃ちゃん？随分いきなりだけど…俺の動作に何か変なところあった？」

困ったようにきかれた。変だったか、ってきかれたら、そりゃまぁ…

「変よ。だって、楽しくないって思ってるのに、楽しそうに笑ってる。今日の幸…昨日迄の幸は知らないけど…本当に楽しくて笑ってない」

……何か、自分でも何言ってるのか全くわからなくなってきたよ。

「まぁ、とりあえず…作り笑いも、しすぎるとダメなんだよ？必ずどこかに穴がある。う～ん…つまりは、幸の作り笑顔は普通にとってもわかりやすい、って事だよ、うん」

うんうん、普通でしょ。思いっきり作ってるし。

「クッ…アハハハハ！！」

おわっ！？い…イキナリ笑いだした…！？こ、怖いし…！！変な人をみる目で幸をみてみた。だってイキナリ笑いだす何て変な人だし。

「プッ…クククッ…ゴメンゴメン…俺より優妃ちゃんの方が変だからそんな目でみないでよ…ゴメンね？俺のこの作り笑いを完全に見破ったの、優妃ちゃんと玖音だけだよっ…！！…クククッ…ゆ、優妃ちゃんと玖音以外はみんな本物だと思ってるし…少し鋭くても違和感とか感じる程度でさ…今まで作ってきて、完璧だと思ってたんだけど…少なくとも2人は必ず見破る事が出来るとわかって、笑いが込み上げてきちゃった」

最初の方は普通に笑ってたのに、喋ってるうちにまた作り笑いに…最初の方にきき逃せない言葉があった気がしなくもないけど…けれど…

「ねぇ、幸…貴方、もしかして「はい、ストップ」」

言いたかったのにニコニコ幸君からのストップサインが…

「優妃ちゃんの考えはあっている確率が高いからダメ♪」

ちぇっ…つまーんなーいのっ！！まぁいいや！！

「確かこの学園内に店とかあったよね…案内なさい！！…あ、間違えた。案内して！！」

シヴァの手続きなんて後でも大丈夫だもの。私の買い物の方が重要よ♪

スタスタと歩く私に対して、後ろの5人はため息をついてダルダルで歩きだしたのだった…

一日のおわり？

「さて…充分に休んだし、後は夕飯食って風呂だけかぁ……で、何で君達はいるの？」

休む前に買った新しい洋服…膝丈の黒いワンピースを着た状態でエプロンを着け、夕飯を作る気になった私…なったは良いが…何故に玖音達がいる。
ちなみにシヴァは寝るために異界に帰った。学校が始まる日に迎えに来いって言われたから多分当日まで寝るんだと思う。
龍族はよく寝る種族と言っても良いくらい寝るから仕方ないけど。
とにもかくにも…

「玖音、幸、咲夜、菊也。何がしたいの？」

ご飯？でもまさかそんな事のためだけに何てないでしょう…多分。

「「「「ご飯」」」」

……そのまさかだったらしい。これはビックリだわ…

「別に構わないけれど…味の保証は「俺」」

……イキナリ発言の玖音君？超ビックリなんですけど？何故に私の料理の味を玖音が保証するの…？
まぁいいや。とりあえず今日のメニューはどうするか…何が良いかな？とりあえず…豚肉のしょうが焼きと大根の味噌汁と…サラダで良いや。

しょうが焼きはタレ？につけて…時間魔法でしょうが焼き1日位つけた状態にして…放置。
味噌汁は…水入り鍋を火にかけてから大根をきって…あぁ、沸騰するの遅い！！魔法使えば良いけど…
めんどくさい。先にサラダ作ろ。ペリペリ剥いで…和風ダレ作ろ。適当にタレ混ぜて…おぉ、出来た。
すごい。適当なのにそれなりの味。さっさとかけて…っと。
あ、味噌汁用のが沸騰した。さっききった大根投入。して…後は暫く放置。
次は豚肉のしょうが焼き作ろ。フライパンにベシベシ豚肉並べて…
うわ、豚肉多っ！！手早く焼いて…皿に盛ったら……山になった。
ま、まぁいいや。次、次、次は、と…
大根がもう味噌とかしても良いくらいか。よし、とかす。さぁ、とかす。そしてそのまま暫く煮る。……煮る？
うん、まぁ魔法でサラダとしょうが焼きフワフワ運んでおいて…何かないかな～…冷蔵庫を物色してみつけたのは…桃がいっぱい。…誰の趣味よ、これ。
桃きるの嫌いなのよね…種が面倒だから…魔法でやっちゃえ。
そして大根の味噌汁は…よし、いっか。鍋敷き持って…鍋本体は魔法で運ぶ。私の後ろは…鍋、お椀の行列が…何か変。まぁいいや。
鍋敷きをテーブルにおいて…鍋が鍋敷きに到着。お椀は重ならせて…桃持ってこなきゃ。
キッチンに戻って魔法で桃をきって皿にのっけて…また魔法で運ぶ。
そしてテーブルにおいて…

「「「「いただきます」」」」

……はやっ！！おいた直後に言ったよ！？つかご飯いつの間に盛ったの！？ま、まぁいいや。私も食べよ…

「いただきます」

育ち盛り？の男の子ってのは恐ろしいわね…みるみるなくなっていくって言うのはああ言うのを言うんだと思ったわ。
４人が帰った後お風呂に入りながら思った。あれはすごかった。玖音だってあんなに食べるなら昼もっと食べれば良かったのに…
ボーッとしながらお風呂からあがってリビングの森がみえる出窓のところへ。出窓の下枠に斜めに座って横枠に寄り掛かる。そうしてボーッとしていた。

、コンコン…

……恐らく玖音だろう。契約書を渡しに来たのだと思う。そして玖音は私が今誰にも関わって欲しくない気分なのもわかっていて、来ている。

「…良いわよ」

私の了承の声をきき、入ってきた玖音…パジャマ…なのかしら？黒いシャツに黒いジーパン。何故に…？まぁそれよりそれが普段着なのか室内着なのかパジャマなのかがすごく気になる。……すごく。

「……ねぇ、それパジャマ？普段着？室内着？何なの？」

心底疑問なので、眉をよせ、きいてみた。ら、玖音は自分の服装をみおろした。納得した表情になって自分の服の裾をつまむ。

「……パジャマ…がわり、だ…」

疑問解決な私は頷いた。…って、あら？微妙に口数多い気が…と、新たな疑問に首をかしげたが玖音が来た理由に目が向いた。
彼は手に紙…契約書をもっている。やはり渡しに来たらしいが…それだけなら明日でも良かったんじゃ…？…ま、いっか。
私が気付いたのに気付いたらしい玖音は、私に紙をさしだす。目を通して…うん。ｏｋ。…あ、そうだ。
ある事を思い出した私は、ニコリと笑って玖音の手をひき、ドアから一番遠いスミに。そこには大量の紙袋が…
イヤな予感がしたらしい玖音は、顔をしかめ、クルリと回れ右をしようとする…が。

「誰が逃すか良い獲も…じゃなかった。私が逃がすと思っているの？玖音」

玖音の手をガシッ。と掴み、ニーッコリ。と、満面の笑顔。紙袋の一つをあけ、中を漁る。…あ、あった。
そうそうに諦めたらしい玖音に紙袋の中から探しだした服をさしだした。
その服を見下ろしイヤそうな顔になる玖音…ため息をついて受けとると、洗面所へ向かった。着替えてくれるらしい。
玖音に渡した服は昼寝前の買い物の時に服を買おうとしてみつけたもの。
男性服も女性服も売っていて中性的な服ばかりのその店にイヤな予感がしたらしい玖音はついてきて阻止しようとしたけど…無理矢理休ませた。第一玖音が口で私に勝てるわけないし？

「あは。やっぱり玖音は何でも似合うわね？」

玖音がでてきて私は言った。玖音に着させた服は簡単に言うとゴシ

ック系。美形は何を着ても似合うわね…
て言うか…何か眠い…？いつも眠くなる事はあまりないのに…でも、
玖音に夜会うと必ず眠くなる気がする…
ボーッとしながらも色々考えていると…眠、い…あ、れ…私、倒、
れ…
……そこからの記憶は、ない。ただ…

「毎回こうだな…倒れるように眠って…優妃、どうか…夢だけでも
幸せであれる事を…祈ってる」

……いつも無口な玖音が…とても饒舌に話していたような…そんな
気がした。

はぷにんぐ？

「…っ…！？…は…う…あ…！？…な…」

……ハイ。私自身が発した言葉だけど我ながら意味がまったくわからない。でも、私自身の言葉の意味がわからない事なんて…この際どうでも良い…！！

私は昨日…学園に帰って来た後…買い物に行った。

様々な品々を買い揃えて、満足して…で、学園で与えられた部屋で何故か居座っていた玖音達を気にせず休んだ後…ご飯まで食べてからやっと帰った彼らの食べっぷりに感心しながらお風呂に入って…で、ボーッとしてたら玖音が来たんだった。丁度良いから着せ替えして…そこからの記憶はとても曖昧だ…が。

「な…何で玖音がベッドで一緒に寝てんのよ…！？」

ちなみに玖音を起こさないように小声で言っている。玖音は下手に起こすと大変な事になるから…

…玖音、私に抱きついて寝てるし…力づくで離すのも悪いし…うん、でもどうしよう…このままだと起きれないし…ま、いっか。どこかに行く予定もないし…

……と、思ったら玖音の目がさめた。薄く開けた目で私をみている。目をこすっていて、眠そう…って、今抜け出るチャンスじゃんか！！ハッ！！と気付いた私…一歩遅かったらしく、逃げ切れなかった…

「……おはよ…」

朝だからか、ふにゃ…と、ホワホワとした顔で笑う玖音…か、かわ

いい…

「…おはよう。ところで…何故私達は一緒に寝ているのかしら…？」

とりあえず、今現在一番の疑問を玖音におそらく黒いオーラが漂っているであろう笑顔で問うてみた。

…ら、何故か首を傾げられた。…と、思ったら、あぁ…と、納得した表情に。そして暫く何かを考えるような顔になると…

「……掴まれた…」

何故なのか、閃いたかのようにそう言った。…どうやら、倒れたらしき私は玖音に支えられると、服か何かを掴み、離さなかったようだ。

「なるほど…あ、そういえば…今日は玖音、何か予定とかあるの？あるとしたら時間、大丈夫？…今、１０時何だけど…」

私の言葉に目を見開いた玖音。と思ったらため息をついた。

昨日は…寝た？のは、多分…3時、くらい。だから…8時間くらい、ね。久しぶりだわ…こんなに長時間寝たの…と言うか、いつベッドに…？

のんきに考える私…を、みつめる玖音…と、思ったら玖音はベッドから滑るように降りると、リビングへと向かった。

寝るつもりがないのに寝室にいても仕方がないし…玖音に続いてリビングへ…ッ！？

バッターン！！…音がするほど勢いよく扉を閉めてしまう何て…はじめてだわ～…

……私は何も見なかった。とにもかくにも私は今この瞬間は鶏なのだ…あ、今は鶏以下なのだ。3歩と言わず1秒で忘れてみせよう。

何が何でも忘れよう。
深呼吸をしているとコンコン…と扉が軽くノックされる。そのノックに背を扉に預けていた私は扉から離れた。

「どうぞお入り下さいませ」

……どこのメイドよ、私は。
私の声にガチャリ。と扉を開けて入ってきた玖音…彼にしては珍しく、白く美しい歯と、少し長い犬歯を口の端から出してニヤリ。と笑う。

「ホホホ。神城様、本日も大変お天気がようございまして妾も嬉しゅうございますわ。本に妾のような者には嬉しいお天気でございますわ」

逃げるが勝ち。先手必勝。誰だろう。この2つの言葉を考えた素晴らしい人達は…！！
とっても素晴らしいと思う。一瞬でここまで尊敬できたのははじめてだ。
……ちなみに今日の天気はまさに暗雲立ち込める…と言った様子である。そりゃあもう見事なくらい。

「……顔…赤…」

…ニヤリ笑いを崩さずそう言った彼は、昨日玖音に着せていないハズではあるが一応いつか渡そうと思っていた服を来ている。
ちなみにオール黒の、カッコいい系か可愛い系かのどちらかで言うと可愛い系だ。……多分。
黒いシャツに、サラサラとした生地の黒い大きな布でユルユルにリボン。そして下は裾が折れている七分丈の黒いズボンで黒い靴下に

黒いショートブーツ。
あえて言うなら中世貴族の子息。だ。うん。
つか私がワンセットずつわけといたから玖音が適当に着た…ってだけだろうけど…
そして私はどんだけ黒が好きなのよ…昨日選んだ他のヤツだって黒ばっかりだしなぁ…あ、そうだ。

「ねぇ、玖音。昨日、何だか知らないけど物凄く喋らなかった？」

……スゴく、気になる。意識を失う？間際に、何かかなり喋っていたような気がするのよねぇ…

「ッ！？」

わぁ、スゴい驚いた顔…アレ、じゃあマジであれは玖音…？

「…何、で…」

あ、マジで玖音なんだ…まぁ、そうじゃなきゃそこまで動揺しないわよね…

「あぁ～っと…何と言うか…意識が朦朧としていた、から？かな？」

…と、私が何とも微妙な返答をすると、あぁ…と、納得した表情になる玖音…

「アレ、は…なんつーか…本性？みたいな…」

バレたからなのか何なのかとりあえず普通に話すようだ。

「俺みたいな立場の者は表に感情を出さない方が良い、と幼い頃から教えられてきたから…幼さゆえの端的な思考？で、だったら喋らなきゃいい…とかいう考えにいたって…結果、こうなった」

わぁ～…玖音が長文って慣れないぃ～…まぁ、ようするに…

「クセ…って事、ね？」

私の質問にコクリ。と頷く玖音…素直な子ね…

何となく可愛いから玖音の頭を撫でてみた。わぁ～、可愛いわぁ～…ところで…

「どっか、行くんじゃないの？」

首を傾げて問う。と、あ。と言う表情になった。

「優妃も来て…母上のところ行く」

…ま、別にいっか。特に用事があるわけでもないから、ね。

「ん～…了解。着替えるから先外出てて～」

了承の返事をした。ら、鼻で笑われた。ふっ…って！！むかつくぅ…！！

「別に俺はココにいても良いけど？優妃だってさっき俺の「あ゛ーッ！！私は何もみてないきいてない知らないぃーっ！！」」

……もう知らない。私は何も知らない。知らないったら知らない。つーか…本性バレたら遠慮なく喋りよって…！！

しかも玖音絶対ドSだっ…！！サドめ…っ！！
少し涙目の私に、玖音はため息をついて私の頭を撫でると、寝室から出ていった。
妙な対抗心を燃やした私は玖音が背を向けたときにあっかんべーっ！！…ってしたけど。
玖音が寝室から出て行くと、私は寝室についているクローゼットに昨日いれた服のうち何を着て行くかを考えはじめて…
…よし、決めた。玖音が黒い中世貴族の子息風だから…私は白い中世貴族の子息風でいこう♪でもあくまで、風'だからなぁ…
白いフリル付きのシャツに、裾がおれている白い七分丈のズボンで、白い靴下に白いショートブーツ。
玖音のがリボンがなくなって白くなった、ってカンジだ。
着替えた私は玖音がいるリビングへ。というか…紗綾に会いに行くってことは…

「歩いて学園長舎まで行くの？」

流石にそれは遠慮したいのだが…とりあえず目の前の玖音にきいてみた。
でも、だからと言ってバスだと他人の注目が集まるから嫌だ。玖音と一緒にいる時は避けられない注目だ。

「歩き」

どうやら私の心が半分読まれたようだ。あくまで半分だが。

「や〜だ。距離長すぎ」

歩きは拒否です。うん。だって歩くのイヤだし？そう思った私は目の前の玖音に触れた。

「はっ！？な、何で玖音と優妃ちゃんがイキナリ出現！？」

……一瞬の後に、きこえたのは…紗綾…玖音のお母さんの声。

「ん～？そりゃまぁ空間で転移したからねぇ。流石にあの距離を歩くのは…ちょっと、ねぇ」

ニコリ。と笑顔で言う。と、驚いた顔になる紗綾。玖音は何故だか諦めたような顔をしている。

「紗綾は高等魔術師でしょ？別に驚く程の事でもないんじゃない？玖音だって高等魔術師で精神の壱星魔術師でもあるんだし？」

人間に使用できるとされる魔法は全部で１１種類存在し、８種と３種にわけられる。

８種は更に６種と２種にわけられる。

８種は属性魔力と呼ばれる属性解明済みの魔力を使用するが、３種は属性未解明の魔力を使用する。

常人ならば魔法は使用できないが、稀に使用できる場合はあり、その場合は使用できる属性の属性魔術師とされる。

例とするなら火属性魔法を使用できるならば火属性魔術師と呼ばれるようになる。

２属性だと初級魔術師、３属性～５属性だと中級魔術師、６属性～８属性だと高等魔術師となる。

少ない魔術師でも８種の中で６種の自然魔法を一つでも使えれば充分貴重。

実際、使用できる人は稀で、２００人に１人いるかどうか。

そして更に貴重なのが属性未解明の魔力を使う属性未解明魔法。

属性未解明魔法は１０世紀に１人いるかどうか、で、謎が多い。

３種ある属性未解明魔法の内、１種使用できれば壱星魔術師、２種使用できれば弐星魔術師、３種全てを使用できれば流星魔術師…とされる。
しかし１種でも使用できる事すら稀なので、今まで流星魔術師がいた、と言う記録は残っていない。
……まぁ、そんな事はどうだっていいだろう。

「……で、玖音。ここに何か用があるの？」
ここにいて楽しい事がある訳じゃないし…
この後ちょっと行きたいトコもあるしね。

「あ。母さん。優妃に制服とか学園証とか渡すんだろう？」
私の言葉をきいて思い出したらしい玖音が紗綾へと視線をうつし、言う。
…と、紗綾は驚いたらしく、一瞬少し目を見開いて、クスッ…と笑った。

「ふふ…玖音は優妃さんが大好きなのね。制服は言っていた数出来たわ。あとこれ、学園証。優妃さんのは玖音と同じ純金よ。ちなみに銀カードは銀製、その他は銅製」
にこにこ笑いながら言って私に差し出す紗綾…
制服は手で触れて、自分で作った空間に送る。
学園証は星形で、片面にｋ・Ｇ…おそらく神城学園の略だと思われる。
そしてｋ・Ｇとかいてある反対側の面には金カードを表すのだろう、Ｇの文字が。
…あぁ～…う～ん…どうしようか…あ。

1つ思い付いた私は空間の中から探し物…多分この空間にあると思うんだけど…
この空間の中の物、かなり多いからなぁ…ん！あった！
目当ての物をみつけ、確保した私の手にあるのは…ゴールドチェーン。
ゴールドチェーンを持つ手とは反対の手で紗綾を示し、指でクイッ…と、引き寄せる動作をする。
すると、一瞬で私の手には学園証が。
風魔法を使って引き寄せた。まぁ引き寄せる程の距離でもないけど。
ゴールドチェーンと学園証を両方の掌の間へと挟み込む。

「［結］」

一言呟いて掌をひらくと…
学園証の上部に輪がつき、その輪にゴールドチェーンがついている。

「…あ。勝手にネックレスにしちゃったけど…良いよね？」

コテリ。と首を傾げて紗綾にきく。
私の行動を若干ひきつった顔で凝視していた紗綾はコクリ。と肯定。
何故だか紗綾と同じく私を凝視していた玖音は紗綾をみる。

「もう行っても良いんだよな？」

問われた紗綾はまたしてもコクリ。と頷き、肯定。

「今日はもう大丈夫。4月5日は始業式で学園の授業は4月6日からだから、始業式は出席してね？」

……忘れそうだなぁ…

まぁ多分、玖音が覚えておいてくれるでしょ…

「玖音、この後どうするの？私、少し学園の外に出ようと思ってるんだけど…一緒に行く？どこか行く予定あるならそれはそれで送るけど…」

玖音を見てそう問う私に、少し考える目になる玖音。

「……外出するなら…あいつらも良いか？学園内のＳＨＯＰになくて欲しい物あるとか言ってた…」

あぁ、まぁ私も買い物に行きたいだけだし…

コクリ。と頷き、そのまま玖音へと手をのばす…が、玖音に触れる直前でとめた。

「行き先は？」

学園内の地図は既に把握しているけれど…

行き先がわからないから…流石に転移は出来ない。

「…あ。…今の時間なら…あいつらは寮だと思う」

玖音の言葉をきいて、コクリ。と頷いた私は玖音に触れる。

一瞬で景色がかわり、私達は高等部生徒寮の前についた。

まぁそうなるように転移したんだから、つかなきゃ困るけどね。

玖音に触れていた手を話そうとすると、逆につかまれた。

……え、何で？……ま、良いか。

「彼等は何階なの？」

私は玖音を見上げて問う。
「…幸…咲夜…１０Ｆ…菊也…９Ｆ……幸…」
幸と咲夜は１０Ｆで菊也だけ９Ｆらしい。行き先は幸の部屋だそうで…
口数が極端に少なくなったのはおそらく人にきかれる可能性があるからだろう。
色々と面倒なのでそのまま１０Ｆへと転移。
玖音がスゴい驚いてるけどそれは放置で…
驚いていた玖音は何かを諦めたように溜め息…
……え、何で溜め息…？
そのまま繋いでいた手を離した玖音は１つの扉をノックして返事も待たずに開けた。
「お？玖音や。珍しやないか。どないした？わいらに用事でもあるん？」
扉を開けると少し向こうの机を囲む椅子の１つの、２人掛け用の椅子に座る菊也の声…
菊也とはまた別の２人掛け用の椅子にはゲーム中の咲夜、部屋の主である幸は部屋の奥の机でＰＣをやっている。
「おっはよ～！！まぁ、朝じゃないけど♪」
全員私が見えていないらしいので玖音の後ろからぴょこっと出て挨拶。
「おわっ！？優妃ちゃん…！？け、気配なかったで…？」
ギョッ！！…と、驚いた顔になる菊也…

「当たり前よ。私はいつでも気配消してるもの。気付く方が可笑しいわ。……そう言うと稀に玖音もおかしいことになるけれど」

はぁ…？とまさに混乱中。という顔になる菊也…私に聞こえないように、なのか…何やらボソボソと呟きだした。

……ま、きこえてるけど。

「わいは狼やから…鼻はきくはず…変やな…」

その小さな、声とすら言えない小ささの最早音に、クスリ。と口角をあげ、笑う。

「知ってるわ。犬の臭いするし…あなたは純血の王族だから本当に微かだけど…あぁ、言っておくけれど…私の正体をどんなルートから調べようとしても無駄よ？臭いも、情報も、外見以外は全て変えてある。玖音と幸は血臭。咲夜は風と太陽。しかも王族ばかり…国や種族の違いは本来ならば本能的に敵対意識を持つ…それを気にもかけず共にある、なんて…まぁどうでも良いわね。とりあえず、行くなら早く準備なさい。私は魔蓄しておくから」

……息継ぎをせずに一気に言い放つと玖音以外ポカンとした顔…因みに玖音は目を見開いてるだけ。クスッ…と笑った私は、腕を持ち上げる。

？顔の玖音＋ポカン顔の幸達を無視し、ガッ！！と空間を切ると、先のみえない黒い空間が。

……ま、開くためにやったんだけどね。

空間を切って開いた腕をそのまま中に入れて探し物…すぐに見つかったので空間から腕を抜く。

抜いた手には目的の転移用魔方陣（紙からはなれ粒子が集まった状

態で何時でも発動できるもの）。

「ちょっとそこの４人？早く用意しなきゃ先行っちゃうよ？」

私は空間から取り出した魔方陣から手を離し片手を掲げその手を使ってゆっくりと魔方陣を床へ敷きながら言う。

そしてその床に敷いた魔方陣の上に女の子座りで座って目を閉じる。

魔蓄を開始した私の体から立ち上る光は…紅と金…私の正体についての情報が２つもあるわね…

……バレちゃうかしら。まぁまずないだろうけれど、ね…

「なっ…！？紅に金って…！！…金ってことは全属性魔術師…！？それはまだ納得できるけど…っ…！！紅、は…」

幸が驚き気味に言うのと同時に、何故か突然シヴァが現れた。

「当たり前じゃ。この世に存在するどんなものよりも優妃は強い」

実際は必要ないけど一応、魔蓄をしている私…

そんな中で、目を開いた。

その瞳は…紅と金…

「知らない方が幸せなこともあるものよ。玖音は私の正体掴みかけてるだろうけど、ね…」

私は何故か突然来たシヴァに注目している玖音達に言った。

「なっ…！？魔蓄中に目を開いてましてや話すなんてっ…！！」

幸が慌てたように言う。

咲夜と菊也は口と目を大きく開き、ポカーン…といった表情。
玖音は少し目を見開いているだけだ。

「あぁ、大丈夫、大丈夫♪慣れてるし♪……ぅあ…？…あぁ～…ん
ぅ～…」

にこにこと話していたのにいきなり唸りだした私に不思議そうな顔
になる玖音達…

「汝等早うせい。ルナに負担がかかっとる」

何故だか少し機嫌の悪そうなシヴァ。
……間違えた。
少し、どころか、かなり、機嫌が悪そうだ。

「まったく…ルナの力で転移するのすら腹立たしいのに、常でさえ
溢れるルナの力を魔蓄させるなぞ…今、ルナが押さえなくば、汝等
魔圧で死んどる。汝等なぞ、ルナの足元にも……うむ…吸血鬼
の坊は頑張れば及ぶかもしれんな。……おや、他の者もルナには及
ばずもかなりではな……不味いな。汝等、そろそろ本気で
急げ」

最後の方は少し青い顔で言うシヴァ。

「別に私、そこまで限界に近くはないわよ…まぁ、ついた時の魔圧
はしらないケド……あ、言うの忘れてたけど行き先は玖音のとこの
一番新しいタウンよ。確かまだＯＰＥＮしてなかったでしょ」

当たり前のように目を開いて私は言う。
ＯＰＥＮしていないとは言っても少し人がいたりするだろうけど…

玖音がいれば大丈夫でしょう。

「あぁ、じゃあ全員このままで良いや」

幸が私にそう言うと、魔方陣の中へアワアワしているシヴァが一瞬で彼等を突っ込んだ。

「あぁ…なら、よかった…流石に…そろそろ…限界…いく、わ…」

そこで私は一旦言葉を止め…深呼吸。

「転」

私が一言呟くと魔方陣全体から私の魔力である紅と金のオーラが立ち上り、私達を包んだ。

「スゴい…こんな魔力…どこから…」

呆然とした様子で呟く咲夜。

どこから…と言われても…まだ魔蓄した分の１０分の１も出せてないんだけど…

まぁ良いや。体内にとどめておくの大変なんだよね…勝手だけど…ゴメン。一応心の中では謝っておくね。

「「「なっ…！？」」」

突然複数人が驚いた声を出す。

まぁ、ちょっ～…とだけ、私の魔力無理に送り込んだからね…当然の反応だと思う。

「ついたときに魔圧で死屍累々になるよりはまし…でしょうっ…！！」

最後の言葉と同時に一気に送り込ませてもらった。
全員、少し苦しそうな顔をしたが、それと同時に目的地に転移完了。
目の前は幸の部屋から外の風景へと変化していた。

はぷにんぐ？（後書き）

サブタイトルの平仮名はわざとです。
文才がない上に副題の才までないという・・・壊滅的ですねぇ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2430w/

闇色

2011年11月28日07時47分発行